

□何年ぶりかで参加した伴奏講座。新鮮な気持ちで受講することができました。

伴奏はそこそこできるという気持ちで、遊び半分に行ったつもりでしたが、そのごうまんさはまったく打ちのめされました。オブリガートの作り方、合いの手、前奏の意味合い、歌い手との掛け合いのことなどなど、本当に目からうろこでした。労音から行ったメンバーは私以外は全員初めてでしたが、最前列で熱心に聞いていました。“刺激になりました”と言ったアコーディオン習いたてのNさんはじめ、みんなショックだったようです。

前夜では全然伴奏は出来ませんと言っていた人たちも、まとめの講座には何人かから自分で作った曲が披露されました。「早春賦」「若者たち」「母さんの歌」「おおシャンゼリゼ」などなど、オブリガートもまじえたり、素晴らしいもの。勉強の成果でこんなに上達するものかと驚きでした。

わたしは、これは毎年来ないとだめだなと痛感しています。まさに「勉強、実践、練習、実践……」ですね。(五味田)



《講座の中から》

相手との関係・・・伴奏っていうのは相手もいることで、相手との関係では自立した関係である。だからお互いに影響しあう。それだけにただ合わせて弾くだけじゃなくて、自分もその音楽に主体的に参加すること。そんな心構えで弾かなくちゃいけないという、心構えの話を最初にしました。レジメに“伴奏者に必要な音楽的レベル”って偉そうに書いてありますが、場合によっては歌い手さんを乗り越えて、もっと主張して“こうやろうよ”って言うことも必要だよって話をしました。

リズムってとっても大切・・・伴奏の中で大切なことは沢山あるけども、その中でリズムがとても大事だということ。リズムがきちんと安定して提供できないと歌いづらい。ですからリズムが大切だという話をします。

“リズム”というと、何となく三拍子とか四拍子とかがあって考えている人が多いかも知れないけれど、リズムっていうのは、同じ三拍子でもいろんな三拍子がある。シャンソン風なものもあれば、ロシアワルツとか、ウインナワルツとか、それぞれリズム感が違うという話をしました。例えば、ロシアワルツは律儀に三拍を刻むことが多いけれど、シャンソンみたいなものは一拍で取っちゃうことが多い(囚人の歌で実奏)これをロシア風に弾くと音楽が変わってきちゃう。同じ四拍子でもアフタービートで弾くことで音楽が全然変わってきちゃう(モスクや郊外の夕べで実奏)そういう風にリズム感で違うので、沢山音楽を聴いて自分の中で表現してあげる。そうすることで歌う世界が変わってくる。ですからリズムはすごく大事だということです。



リズムは人の心を鼓舞する・・・歌声喫茶なんかでも、一曲の生き生きとしたリズム感だけでステージ全体の雰囲気を変えてしまうことがしばしばあります。伴奏者の果たす役割ってすごく大きいですね。イントロ弾くときに、そこにイニシャチブがある。イントロのときって歌い手は何も出来ない。伴奏する人がイントロで“その曲をどのようにやろう”と指示を出して全体を支配する。ですから、音楽を沢山聴いてそれを何か表現する。これは、練習以外のところでいくらでもできることなのでぜひいい音楽を沢山聴いて欲しいなあと思います。